

(報告書)

若者の飲酒経験に関する研究
—ライフステージごとの歩みと動機に注目した質的研究—

滝口 沙也加 (宮城大学食産業学群)

1. 研究目的

わが国における酒類の消費量は平成8年をピークに減少傾向にある¹⁾。また、飲酒頻度としては、「ほとんど飲まない・やめた・飲まない(飲めない)」計(55.1%)が「月に1日以上」の割合(44.9%)を上回り、人々にとって“飲酒しない”という選択が日常化している。とくに20~30代の「ほとんど飲まない」計は他の年代に比べて高く、若者ほど飲酒行動の定着がなされていない状況にある²⁾。

若者の飲酒に関するこれまでの研究としては、飲酒行動や意識といった実態分析³⁾を中心として、パッケージデザイン評価⁴⁾等の需要拡大に向けた検討がなされてきた。とくに前者においては、大学生⁵⁾や妊婦⁶⁾、女性⁷⁾といった若者を対象に、ライフイベントや対人関係、居住環境といった様々な視点から飲酒行動との関連要因を定量的に明らかにする分析がなされてきた。

しかし、いずれの先行研究も飲酒しているか、飲酒していないかというその時点における当人の状況を測定し関連要因を分析するにとどまっている。つまり、若者において飲酒行動がどのように定着していくのか、そのプロセスに注目し分析した研究は行われていない。前述したように、現代の若者における飲酒行動の定着がみられない状況をふまえれば、どのような過程のなかでどういった変化が生じ飲酒行動の定着がなされるのか(否か)といったプロセスの把握が重要となってくる。

また、飲酒動機については、測定尺度が海外の先行研究をもとに考案されていること、そして研究者によって因子構造が異なるなどにより一貫した見解が認められていないこと、等が指摘されている⁸⁾。つまり、今後の検証を行ううえでも、日本における人々の飲酒経験に関する丁寧な理解が求められている。

以上をふまえ本研究では、質的研究というアプローチを用い、若者がどのような過程を経ることで飲酒行動が定着していくのか(しないのか)という視点から、若者の飲酒経験について時間経過をふまえて明らかにすることを目的とする。このことにより、現代における若者の飲酒行動の定着を促進あるいは阻害する社会的な要因を考察し、今後の消費のあり方の検討に貢献することが本研究における社会的意義である。

なお、本研究では嗜好品としての飲酒行動に注目するため、依存症の治療といった特殊な状況下ではなく日常生活における人々に注目し実態を捉えることとする。つまり、依存症を有する、または依存症が近親者にいる人は分析対象としない。

2. 研究方法

人間の経験を時間経過との関係の中で捉え、当事者の行動選択や意思決定の径路をモデル化する複線径路等至性モデリング (Trajectory Equifinality Modeling: 以下、TEM)⁹⁾を用いる。

調査は2022年8～9月にオンライン上で90分程度のパーソナルインタビューを行った。本研究では、飲酒行動の定着に至るプロセスに注目するため、飲酒経験者を被験者とした。そして、現在の状況として「習慣的にお酒を飲んでいる」(継続者)、または「ほとんどお酒を飲んでいない」(中止者)、という2つの属性を抽出し、それぞれを比較しながら飲酒経験の特徴を分析していく。そのため、インタビューでは、「初めてお酒を飲んだ頃」から「現在」における状況やその時の心情について質問をすることを事前に伝えただうえで、インタビューを行った。また、若者を対象とすることから、飲酒経験は他の年代に比べて少ないことが考えられる。このため、飲酒する以前の幼少期の状況(家族や周囲の飲酒状況や飲酒に対する印象など)も聴取することとした。

被験者は表1に示す首都圏在住で学生を除く20～30代の有職者12名で、リサーチ会社((株)ドゥ・ハウス)所有のリストから抽出した。事前のアンケート調査結果をふまえ、現在習慣的に週に2日以上お酒を飲んでおり、以前に比べて飲酒頻度が増えた人を「継続者」、現在ほとんどお酒を飲んでおらず飲酒頻度は月に1日程度で、以前に比べて飲酒頻度が減った人を「中止者」と定義した。

表1. 被験者プロフィール

	ID	年齢 (歳)	性別	家族 構成	現在の 飲酒頻度	現在の飲酒 シチュエーション
継続者	A	29	女性	夫	週3日	自宅、飲食店で誰かと
	B	32	女性	夫	ほぼ毎日	自宅でひとり
	C	33	男性	ひとり	ほぼ毎日	自宅でひとり
	D	34	男性	ひとり	週3日	飲食店で誰かと
	E	35	女性	夫、子	週5日	自宅でひとり/夫と、飲食店で誰かと
	F	37	男性	妻、子	週2日	自宅でひとり/誰かと、飲食店で誰かと
中止者	G	30	女性	ひとり	月に2日	自宅でひとり、飲食店で誰かと
	H	32	男性	妻	月に2日	飲食店で誰かと
	I	33	女性	実母	月に1日	自宅で誰かと
	J	34	男性	妻	月に1日	飲食店で誰かと
	K	36	女性	夫	月に1日	飲食店で誰かと
	L	37	女性	ひとり	月に1日	飲食店で誰かと

資料：事前のアンケート調査およびインタビュー調査をふまえ筆者作成。

分析過程で作成される TEM 図は、①作成した逐語録をもとにデータの切片化を行い、②被験者それぞれの内容を時系列に並び替え、③被験者間で類似の内容をまとめることで作成される。同図には何らかの分岐が生じている状態・経験を示す「分岐点」から、研究者の研究関心事に近い経験を示す「等至点」との間の「非可逆的時間」において、被験者がどのような径路（選択肢）をたどったのかが図式化される。径路のなかには多くの人を通るとされる「必須通過点」の存在も確認し可視化することで、最終的にはモデルの構成を行っていく。なお、分岐点や等至点では、何らかのせめぎあいや緊張状態が発生していると捉える。分岐点から等至点への歩みを後押しする力を「社会的助勢」、阻害する力を「社会的方向づけ」、として把握し意思決定の背景にある要因の存在も理解していく¹⁰⁾。なお、本研究の「等至点」としては、継続者は「習慣的にお酒を飲んでいる」、中止者は「お酒をほとんど飲んでいない」を設定した。また、必須通過点である「初めてお酒を飲む」に分岐していく「分岐点」を「20歳になる」と設定した。

3. 研究成果

以下、それぞれの属性で明らかになった結果について述べる。分析過程で明らかとなった内容のタイトルは【 】, 被験者の発言については前掲表 1 の ID を使用しながら、発言内容を「 」で、該当者および発言者を（ ）内で示し説明する。

3.1. 継続者の飲酒経験

継続者 A~F6 名の飲酒経験は、大きく 4 つの時期に分けることができる（図 1）。

3.1.1. 第 I 期：初めて飲酒するまで

【初めてお酒を飲む】までに至る過程の詳細は図 2 の通りである。

幼少期における同居家族の飲酒状況としては、A,C,F が【自宅で両親と一緒に飲酒する】、B,D が【自宅で両親いずれかが飲酒する】、E が【両親は飲まないが、近くに住む祖父が飲酒する】となっており、飲酒者が身近にいたことは共通している。しかし、そうした家族の飲酒状況から受ける印象としては、【お酒は飲むと楽しい、場を円滑にするもの】や【お酒を飲むことへの憧れ】といった飲酒のポジティブな内容だけではなく、【飲酒に特に思い入れは生まれにくい】や【飲酒する両親を心配する】といった内容も存在しており、家族の飲酒状況だけではなく、【CM やドラマ、広告】や見知らぬ人が酔っぱらっている状況を目にすることで、【酔っ払いになりたくない】や【お酒は体に良くない】という飲酒に対するネガティブな印象につながっている。なかでも E だけが【早く飲んでみたい】という飲酒への期待があったことがわかる。

その後、すべての被験者が【新しいコミュニティに所属する】こととなる。大学入学を経てサークルや新しくできた友人、アルバイトといった対人関係の広がりを経験す

る。その後、分岐点として【20歳になる】を経験し、【食卓で両親が飲酒】する A,F,C は【親に勧められる】ことがきっかけで、その他の被験者は【どのくらい飲めるか知りたい】などの理由から【お酒を飲んでみたい】という気持ちを抱くことで、必須通過点である【初めてお酒を飲む】に至る。

分岐点においては、飲酒可能な年齢になることで周囲の勧めや飲酒への興味が出てくる様子が理解できる。つまり、飲酒というこれまで経験したことのない未知なるものへのネガティブな印象や期待が「社会的方向づけ」としてありながらも、20歳になることで飲酒が解禁され飲酒者である両親の勧めや未知なる体験への興味が出てくるのが「社会的助勢」となり、分岐点後の【初めてお酒を飲む】に至る。

3.1.2. 第Ⅱ期：社会人になるまで

必須通過点【初めてお酒を飲む】を経た後は大きく径路が2つに分かれる（図3）。1つは、「ビールは苦くておいしくなかったのでびっくりしたが、甘いチューハイは美味しくて口にあった（E）」のように【美味しいお酒との出会い】（B,E）があったケース、もう1つは、「初めて飲んだときは、美味しいとは感じなかった（A,F）」といった【お酒は美味しくない】（A,C,D,F）とを感じるケースである。

その後、必須通過点である【社会人になる】においては、「体質的に辛かったという経験はなかった（A）」のように【飲めない体質的ではない】という自身の体質に対する気づきや、【大人になったワクワク】した気持ちを経て、【お酒を飲むことの良さを実感】する。「お酒がきっかけで初対面の人とも仲良くなった（F）」や「人と話すのが苦手だったが、お酒を飲んでから人間関係を築きやすかった（B）」の発言からは、飲酒をすることで対人関係が良くなった経験をしていることがわかる。それに対し、「集まりの中心が飲み会で、そこに顔出しておかないと、他の遊びが急遽入った時もあまり誘われなくなるんじゃないかと思っていた（D）」という理由から【誘いは断れない】というように対人関係を維持するためには飲酒をやむを得ないという後ろ向きな気持ちから飲酒する人もいる。さらには、幼少期の経験が影響し飲酒を継続する人も見受けられる。例えば、幼少期に父から職場での飲み会の愚痴を聞いたCは【慣れるため】に、幼少期に祖父が飲酒する姿に憧れを抱いていたEは【飲めるのはかっこいい】、という意識から飲酒を続けている。

つまり、継続者であっても、初めて飲んだ酒の味については必ずしも全員が良い印象を持ったわけではなく、社会人前の学生時代においては飲酒の良さを実感した人ばかりではないことがわかる。

3.1.3 第Ⅲ期：飲酒頻度が増えるまで

必須通過点【社会人になる】を経た後は、いずれも【定期的に会社の飲み会がある】

を必須通過点として経験する（図 4）。しかし、会社の飲み会に対しては、【すごく楽しい】と感じる人がいる一方で、【気を遣う】や【行きたくない】という否定的な気持ちを抱く人もいる。

前者の【すごく楽しい】を経験した被験者のなかには、「お酒は人とのコミュニケーションが深まるという楽しさがある。上司や同僚の仕事だけでなく、どのように生活しているかなどの違った面も見え、仕事をするときにもスムーズに進んだ（A）」のように、【飲酒機会がきっかけで業務がスムーズに】なり、必須通過点【飲酒頻度が増える】に至る被験者もいる。

そして後者の否定的な気持ちを抱く被験者は、自宅やプライベートで飲酒する機会を得ることで、必須通過点である【飲酒頻度が増える】に至る。好きな Youtuber やひとりで飲酒する人を飲食店で見かけるなどの経験をすることで、【ひとりで好きなお酒を飲んでもいいという気づき】を経て、ひとりで飲酒することを肯定的に捉えるようになる。加えて、【経済的余裕】や【自宅で過ごす時間の余裕】が生まれることで、【飲酒頻度が増える】ようになる。

このように、飲酒頻度が増えるまでの過程においては、必須通過点【定期的に会社の飲み会がある】ことが直接的な影響を与えているわけではないことがわかる。つまり、職場の飲み会を肯定的に捉える人では、場の楽しさや飲酒を通じて業務がスムーズになるなどの飲酒のメリットを実感したことで飲酒頻度が増える一方で、職場の飲み会を否定的に捉える人では、上司に気を遣う等からできれば職場の飲み会には行きたくないと感じ、職場の飲み会ではなく友人との飲み会やひとりで自宅で飲酒する機会を設けるようになり、飲酒頻度が増える。

3.1.4. 第Ⅳ期：現在

必須通過点【飲酒頻度が増える】を経てから等至点【習慣的にお酒を飲んでいる】に至るまでの径路は、飲酒シーンや状況により異なる（図 5）。

1 つは、誰かと一緒に飲酒する径路である。「飲む人と飲まない人への上司の反応の違いを見て、お酒を飲まないことに対してネガティブな気持ちを持つようになった（A）」や「お酒が好きなではない人とは居酒屋じゃなくて美味しいご飯屋さんに行っている（D）」の発言のように、飲酒の場における【相手への印象】を考慮し、自身も飲酒することを選択するケースである。それにより、ひとりで飲酒するというよりも【誰かと出合いわいわい飲む】ことが当人にとっての飲酒の意味づけとなっている。

そしてもう 1 つは、ひとりで飲酒する径路である。「相手のことを気にせず、自分の好きなようにできるため、1人で飲むのは疲れにくい。お酒は、リラックスや癒やしをもたらしてくれるもの（B）」や「仕事に慣れるためにがむしゃらに働き、ご褒美感覚でお酒を飲む。お酒は味を楽しむより、体をリフレッシュするために飲んでいた（C）」

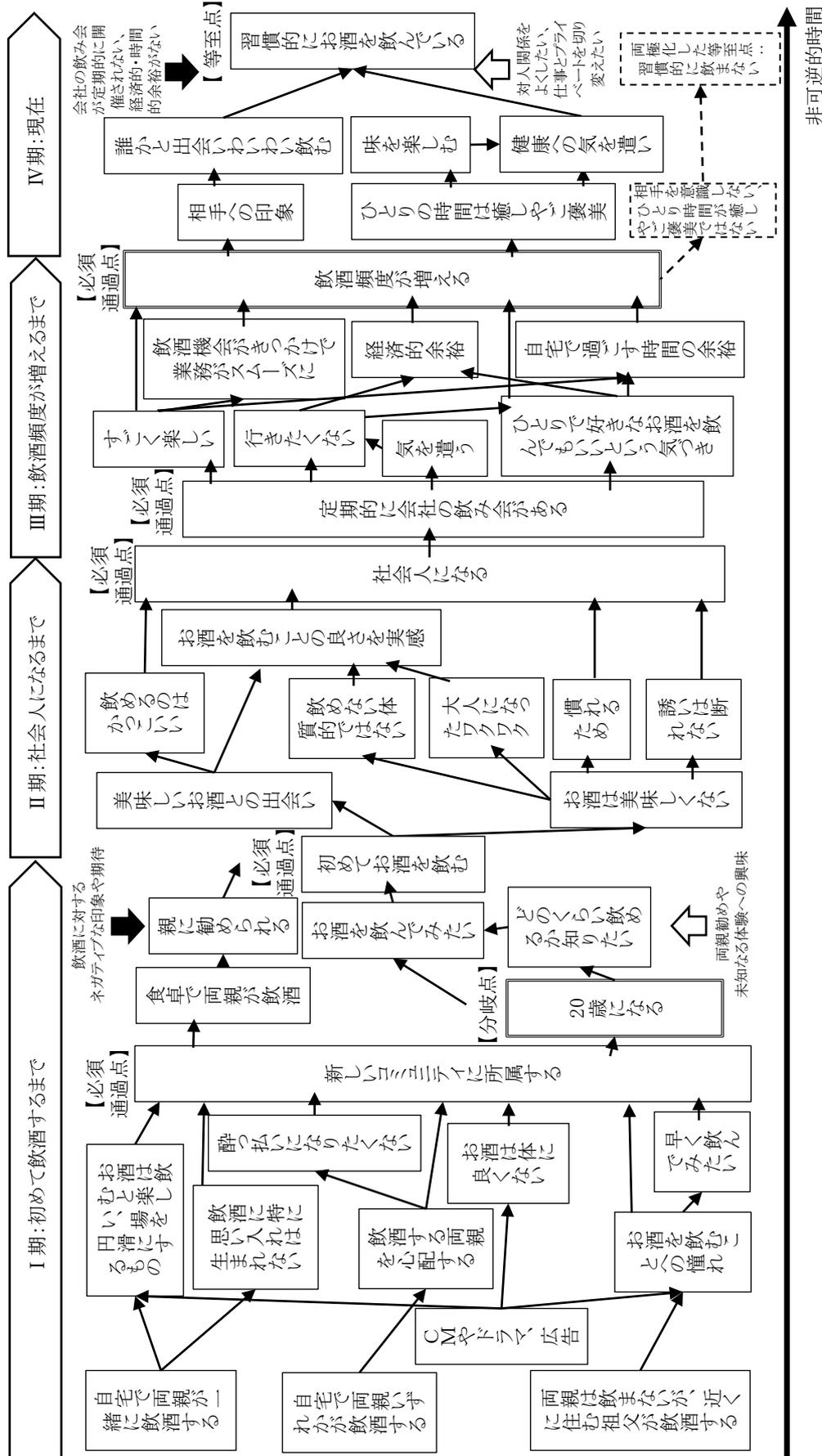


図1. 継続者の飲酒経験 (TEM図 (全体))

資料: インタビュー調査をふまえ筆者作成。

1) TEM図の作成にあたっては安田ら(2015)を参考にした。「社会的助勢」を白抜き矢印で、「社会的方向づけ」を黒塗り矢印で示す。また点線で括られた箇所は実際には選択されなかった経験である。

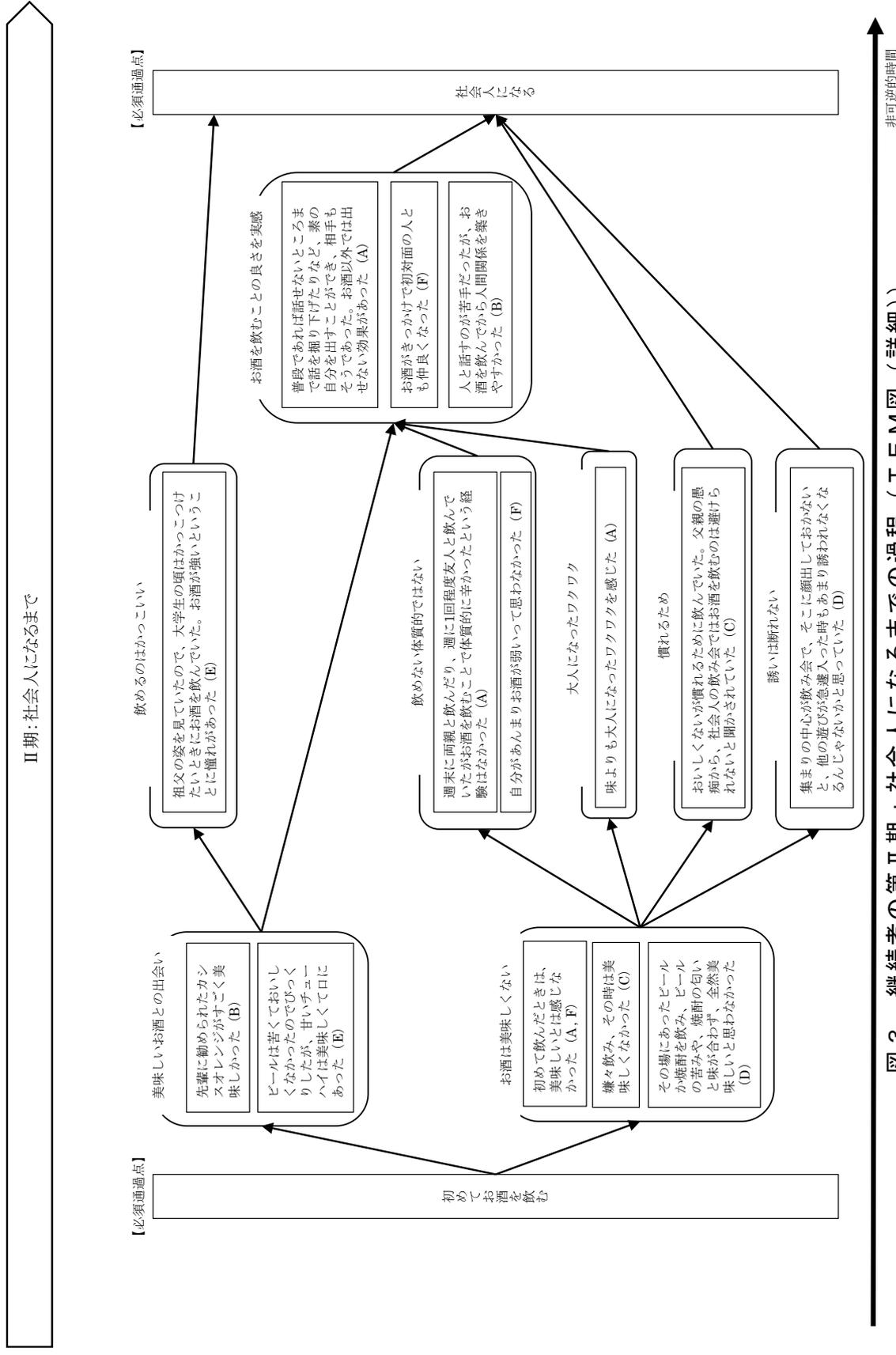


図 3. 継続者の第II期：社会人になるまでの過程 (TEM図 (詳細))

資料：インタビュー調査をふまえ筆者作成。

1)図 1 に同じ。

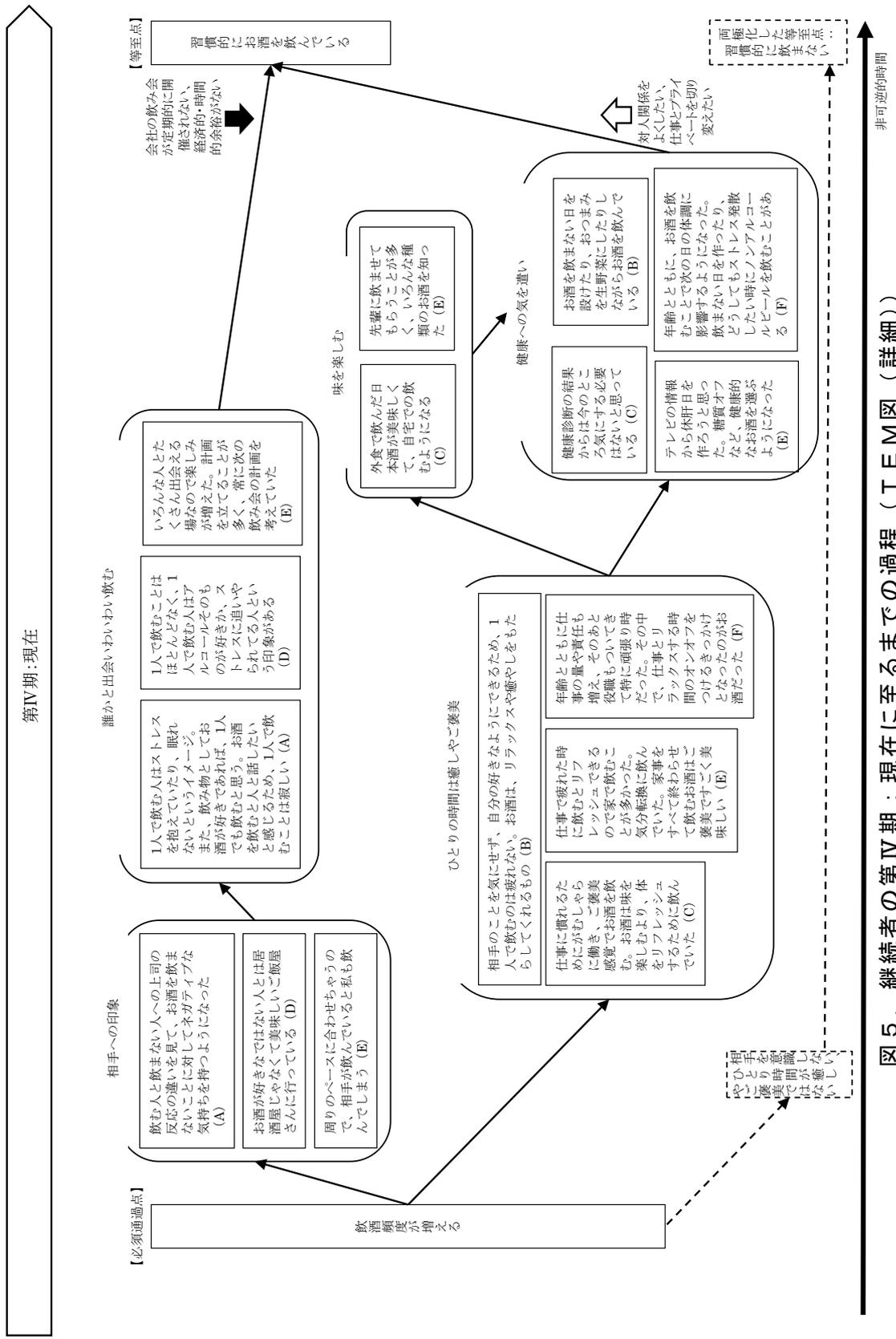


図5. 継続者の第四期：現在に至るまでの過程（TEM図（詳細））

資料：インタビュー調査をふまえた筆者作成。

1) 図1と同じ。

の発言のように、飲酒を【ひとりの時間は癒しやご褒美】として意味づけるケースである。自身のための時間を過ごすことで、初めてお酒を飲んだ時期には経験しなかった【味を楽しむ】経験をする。また、20～30代であっても【健康への気を遣い】ながら飲酒している。「テレビの情報から休肝日を作ろうと思った。糖質オフなど、健康的なお酒を選ぶようになった(E)」や「年齢とともに、お酒を飲むことで次の日の体調に影響するようになった。飲まない日を作ったり、どうしてもストレス発散したい時にノンアルコールビールを飲むことがある(F)」のように、機能性アルコール飲料を飲むようにしたり休肝日を設けたりするなど、飲酒を継続して楽しめるような工夫する行動もみとれる。

等至点においては、定期的に会社の飲み会が開催されなかったり、自身の経済的・時間的余裕が生まれず「社会的方向づけ」としてありながらも、対人関係を良くしたり、仕事とプライベートを切り替えたい気持ちが「社会的助勢」となっている。

3.2. 中止者の飲酒経験

中止者 G～L の飲酒経験は、大きく 4 つの時期に分けることができる (図 6)。

3.2.2. 第 I 期：初めて飲酒するまで

分岐点後の必須通過点【初めてお酒を飲む】に至る過程の詳細は図 7 の通りである。

継続者とは異なり、中止者では【両親は飲まない】G,J がいるものの、多くが【自宅で両親が飲酒】していたり、【自宅で両親いずれかが飲酒】していたりするなど、幼少期から両親が飲酒する姿を日常的に目にしていたことがわかる。なかでも「父の友人がバーベキューでお酒を飲むのを見ていた(L)」のように、【自宅で父と来客が飲酒する】場に子どもころから参加していた人もいる。

そうした家庭環境のなか、両親が飲酒していた被験者は飲酒に対して【美味しそう、楽しそう】というポジティブな印象を抱き、両親が飲酒しない被験者は【興味がない】という印象を持つ。また、【CM やドラマ等】や【居酒屋で酔って喧嘩する集団】からは、「CM 等でお酒は太るという記憶があった(L)」の発言のように【太りそう】という印象や、両親の飲酒する姿も加わることで「酒癖が悪い父の姿からお酒は気をつけて飲むものだと思った(K)」や「ドラマのイメージで酔っぱらったら大変そうだった(G)」のように【良い印象がない】という印象につながっている。

その後、被験者らは大学生になりゼミやアルバイト、サークル、新しくできた友人といった【新しいコミュニティに所属する】ことを必須通過点として経験する。そして【20歳になる】という分岐点に至り、その後必須通過点である【初めてお酒を飲む】に至る。その過程においては、「成人記念に両親から「飲んでみる？」と勧められた(L)」のように【親に勧められる】人もいるものの、大きく 2 つの径路に分かれている。1 つ

は【断ることができない】という径路、そしてもう1つは【興味があり飲んでみたい】という径路である。前者では、「お酒に興味がなかったので飲みたいとも思わなかったが、先輩もいたので断ることもできなかった (J)」や「飲まない選択はなかった (H)」という発言にもあるように、新しく参加したコミュニティにおいて年上から勧められ断りきれず、飲酒に至った経験をしている。一方、後者では、「お酒に興味があった。知らないものに手を出してみたい感じ (I)」や「お酒を飲んでいるグループの方が話が盛り上がっていて楽しそうでいいなと思った (K)」のように、これまで飲んだことがないお酒に注目し、自らの意思で飲んでみたい気持ちが生まれた様子が見えてくる。

こうした分岐点における状況としては、前述した継続者とは少々異なっている。それは、【断ることができない】という経験を被験者の半数が経験している点である。前述した継続者では確認できなかった内容であり、自らの興味や意思で飲酒に至ったわけではない人が存在している。

なお、分岐点においては、飲酒というこれまで経験のない行動に否定的な印象や、年上の誘いであっても断ることのできる状況（「社会的方向づけ」）がありながらも、20歳になり飲酒が解禁され、周囲の勧めを断れない状況や飲酒という未経験に対して興味がわいたことが「社会的助勢」となり、分岐点後の【初めてお酒を飲む】に至る。

3.2.2. 第Ⅱ期：社会人になるまで

必須通過点である【初めてお酒を飲む】から必須通過点【社会人になる】に至るまでには、前述した継続者には見受けられなかった2つの経験が確認された（図8）。

1つは【体調に変化】である。「飲めないわけではなくお酒を飲むと顔が赤くなったり、頭痛や気分が悪くなる (J,L)」のように、飲酒することで見た目や具合が悪くなることに気づいた被験者もいる。2つ目はお酒に対する【印象が悪くなる】である。「サークルやアルバイトの飲み会で同調圧力を感じていた。幼少期の楽しいお酒の印象とは異なりあまりいいものではなかった (L)」の発言にもあるように、幼少期に抱いていた良い印象と自身の経験から感じた印象とに違いを感じた様子が見えてくる。

その他、初めて飲酒した際の印象としての【思ったよりも飲めそう】や飲んだ酒の味を【美味しくない】と感じた経験は、前述した継続者同様である。また、「お酒を飲んだ方が楽しい。なんでも面白くて笑っちゃう。先輩たちと仲良くなれる機会だと思った (G)」や「お酒があると楽しい雰囲気の中で色々話せて食べて、時間を忘れる。その場を楽しませる人間関係を近づける存在 (H)」の発言のように、幼少期に両親が飲酒していなかった経験をした人や、自らの意思ではなく先輩に勧められ初めて飲酒した人であっても、お酒を飲むことで話が盛り上がるなど、飲酒を【楽しいと実感】している。

3.2.3. 第三期：飲酒頻度が減るまで

必須通過点【社会人になる】を経た後、【会社の飲み会が定期的にある】ケースや、【忙しい仕事終わりに飲む】ケース、【休日は交友関係を広げる場に参加】し飲酒するケース、が存在しており、いずれも飲酒が身近なものとなっている（図 8）。とくに、前述した継続者とは異なり、中止者ではすべての被験者が【会社の飲み会が定期的にある】わけではない。「勤務がとてもハードで、仕事終わりにお酒好きな同僚と一緒にお酒で喉を潤していた（L）」や「仕事が終わるのが遅く、職場で残っていた人たちと飲むことが多かった（I）」のように、多忙な職場においては計画的に開催される飲み会ではなく、残業後に居合わせた同僚との飲み会が行われ、そこで飲酒されている。また、幼少期に抱いた飲酒の良い印象が学生時代の飲み会から悪い印象へと変化した L においても、「休日は合コンや飲み会で交友関係を広げなかった（L）」の発言のように、新しい対人関係を築く場での飲酒機会を受け入れ飲酒していることがわかる。

そして、飲酒に対する印象は飲む相手によって異なっている（図 9）。例えば、【会社の飲み会が定期的にある】の後には、【楽しい】、【気を遣い楽しくない】、【勉強の場であり必要なもの】という印象につながっており、参加している職場の飲み会での会話や飲むお酒の違いによっても印象が異なっているようである。なお、上司や役職者が参加するような定期的な会社の飲み会ではなく、残業後の同僚や異性を含む合コン仲間といった人との飲酒、いずれにおいて【楽しい】という印象につながっており、「会社の飲み会と違い気を使わないのでストレス発散の場になった（K）」の発言のように【友人との飲み会は楽しい】とする被験者もいる。

その後、飲酒が身近になった被験者らは大きく 2 つの径路に分かれる。1 つは、【飲酒習慣から自宅でひとりで飲む】という経路である。「お酒が好きになり、飲み癖がついた。お酒は一息つくのを助けてくれる、気を紛らわすためのアイテム（I）」や「会社の飲み会がなくなったとき、なんとなく飲みたい気分になり自宅で数回かひとりでお酒を飲むことがあった（K）」のように、飲食店での飲酒が日常的に行われるようになることで、自宅でも飲酒するようになる。しかし、その後、新たな友人との出会いや家族との同居をきっかけに【お酒を飲まない人と一緒にいるようになる】。そのことにより、「お酒がなくてもお酒を飲んでいた時と同じくらいコミュニケーションできたのでお酒の必要性を感じなくなった（G）」や「母が飲まないためひとりで飲むのは気が引ける。飲まないことが日常になるとなくてもいいと思った（I）」の発言にもあるように、【お酒を飲みたくなくなる】を経て、必須通過点【飲酒頻度が減る】に至る。

そしてもう 1 つは、【ひとりでは飲まない】という径路を辿るものである。「「お酒＝太る」というイメージがあったので一人では飲まなかった（L）」や「会社を遅刻するとチーム全体の連帯責任としてのペナルティがあり迷惑をかけたくないと思ったし、ひとりで飲む目的がわからない（H）」のように、幼少期のお酒に対するネガティブな印

象や社会人として遅刻をして迷惑をかけられないという気持ちから、自宅でひとりで飲酒することはなかったケースである。そして、その後、【職場や部署が変わる】という経験から【仕事終わりに飲みに行かなくなる】を経て、必須通過点【飲酒頻度が減る】に至る。その過程においては、転職や部署異動により職場環境が変わることで「顧客対応による突発的な対応がなくなり、計画が立てやすくなった (L)」や「転職を機にストレスがなくなったり、収入や勤務時間、体調が改善した (J)」のように、【プライベートな時間が増えストレスも解消】された経験が存在している。また、転職によって車通勤となるなどの【通勤手段の変化】が生じ、仕事終わりに飲酒する職場文化ではなくなり、飲酒しなくなるケースも見受けられた。

3.2.4. 第Ⅳ期：現在

必須通過点【飲酒頻度が減る】を経た後は、必須通過点【適量を誰かと一緒に飲みたい】を経験し、等至点【ほとんどお酒を飲んでいない】に至る（図 10）。

飲酒頻度が減ることで、「お酒を飲まない方が安心する。自分の感情をコントロールする方法（瞑想）を得た (I)」や「体を動かして運動不足を解消してストレスを発散している (L)」のように、【お酒以外でストレスを解消】するようになる。しかし、決して飲酒に対して悪い印象を抱いているわけではない。例えば、「お酒に合わせてお店を選ぶ楽しさを知る。これまで知らないお店を知れるのは自分の世界が広がる (J)」のように、飲酒を飲食店選びの際の視野の広がりを与えてくれるものとして捉え【お酒は自分の世界を広げてくれる】としていたり、「これまで飲んだことのないお酒のおいしさを楽しみたい (L)」のように【お酒の味を楽しみたい】といった意思を抱くようになる。そうしたことから、【適量を誰かと一緒に飲みたい】という必須通過点に至っている。「誘われれば行く。お酒の場が嫌いなわけではない (H)」や「お酒は旅行やパーティー等の特別な時に飲みたい。食事がよりおいしくなりリラックスできる (L)」のように、飲酒を好意的に思っており、そうした場に参加することには前向きであることがわかる。

等至点においては、お酒の場を通じて職場や家族といった対人関係を構築する生活が「社会的方向づけ」としてありながらも、お酒を飲まない家族や職場の存在が「社会的助勢」となっている。

4. 考察

継続者と中止者の飲酒経験を比較すると、いずれの属性においても親の飲酒状況や幼少期の飲酒に対する印象は様々であったこと、そして学生時代から社会人時代における友人や同僚との場に飲酒が密接に関わっていたことは共通している。中止者のなかには、幼少期に抱いていた飲酒の良い印象が学生時代の飲み会によって悪い印象へ

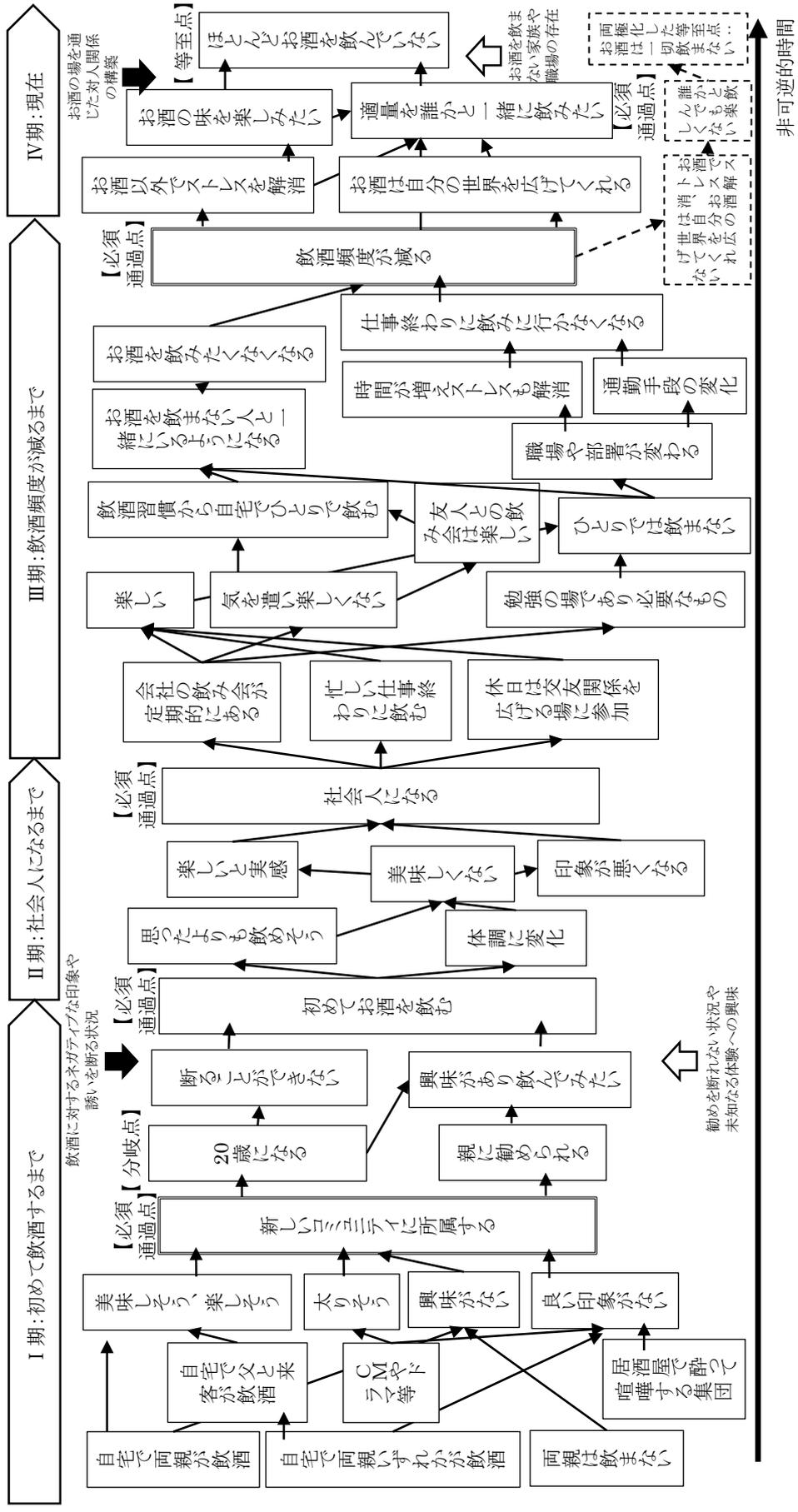


図6. 中止者の飲酒経験 (TEM図 (全体))

資料: インタビュー調査をふまえ筆者作成。

1) 図1に同じ。

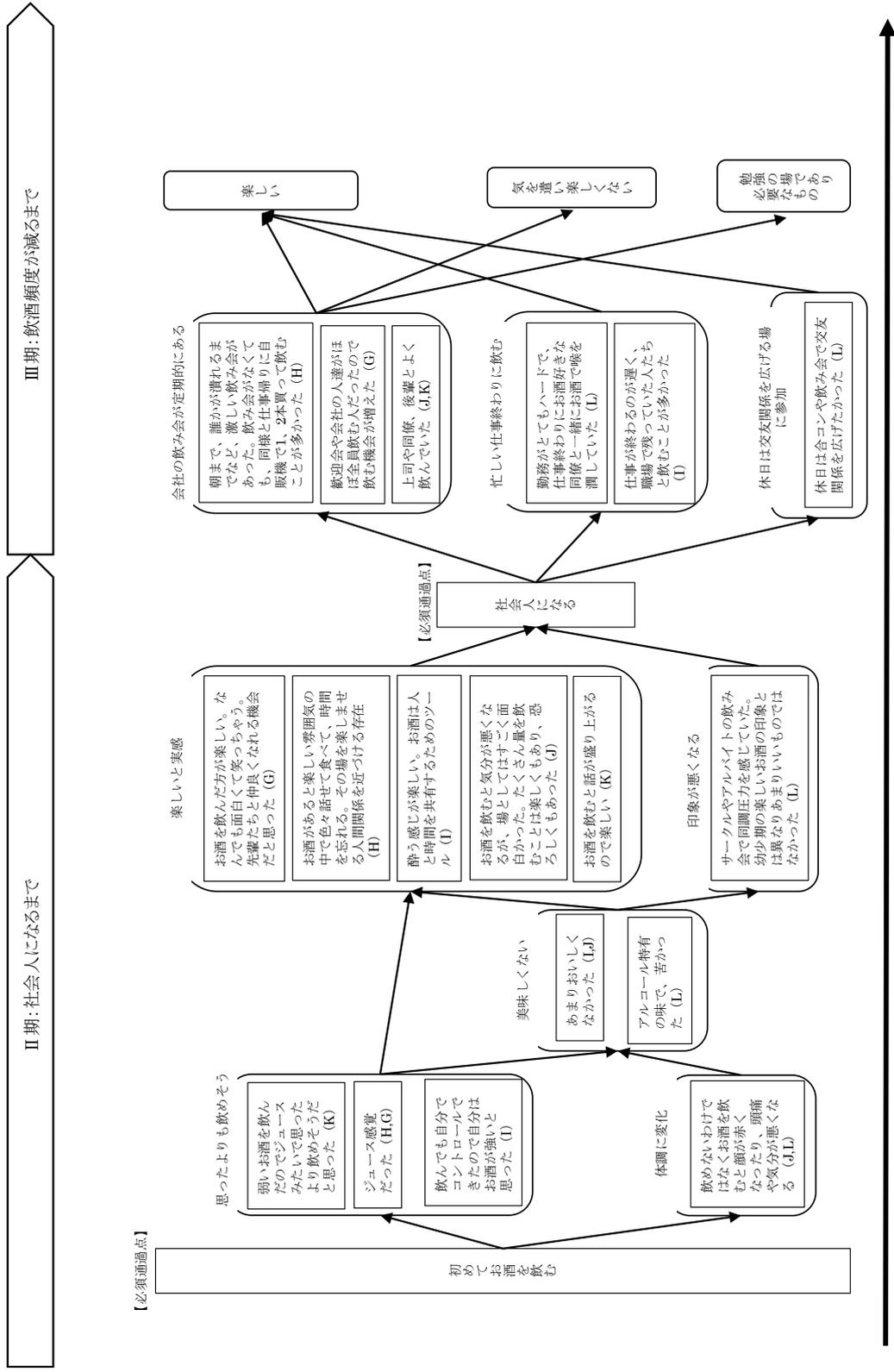


図8. 中止者の第II～III期：社会人になり、飲酒頻度が減るまでの過程（TEM図（詳細））

資料：インタビュー調査をふまえ筆者作成。

1)図1に同じ。

Ⅲ期：飲酒頻度が減るまで

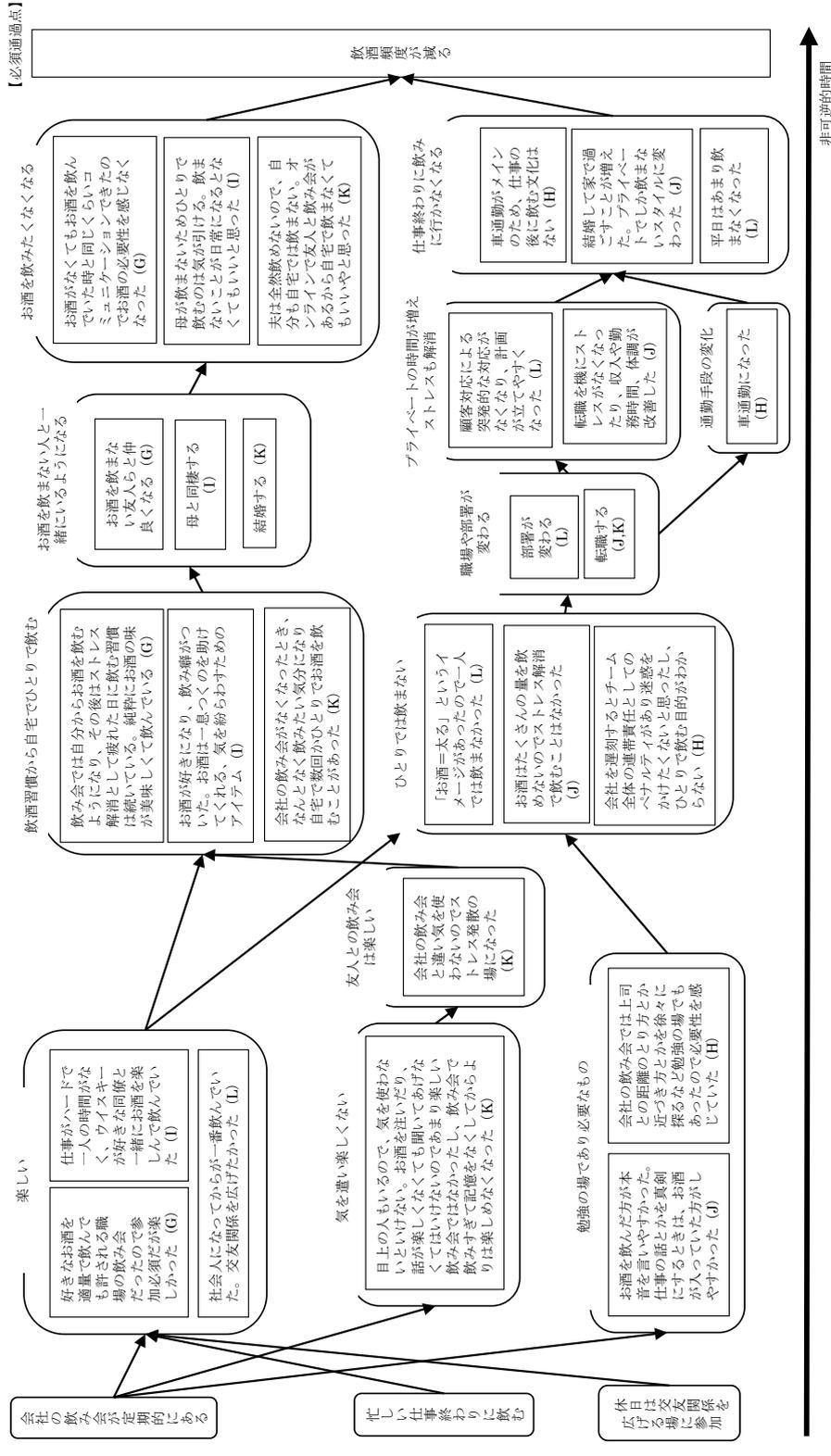


図 9. 中止者の第Ⅲ期：飲酒頻度が減るまでの過程 (TEM図 (詳細))

資料：インタビュー調査をふまえ筆者作成。

1) 図 1 に同じ。

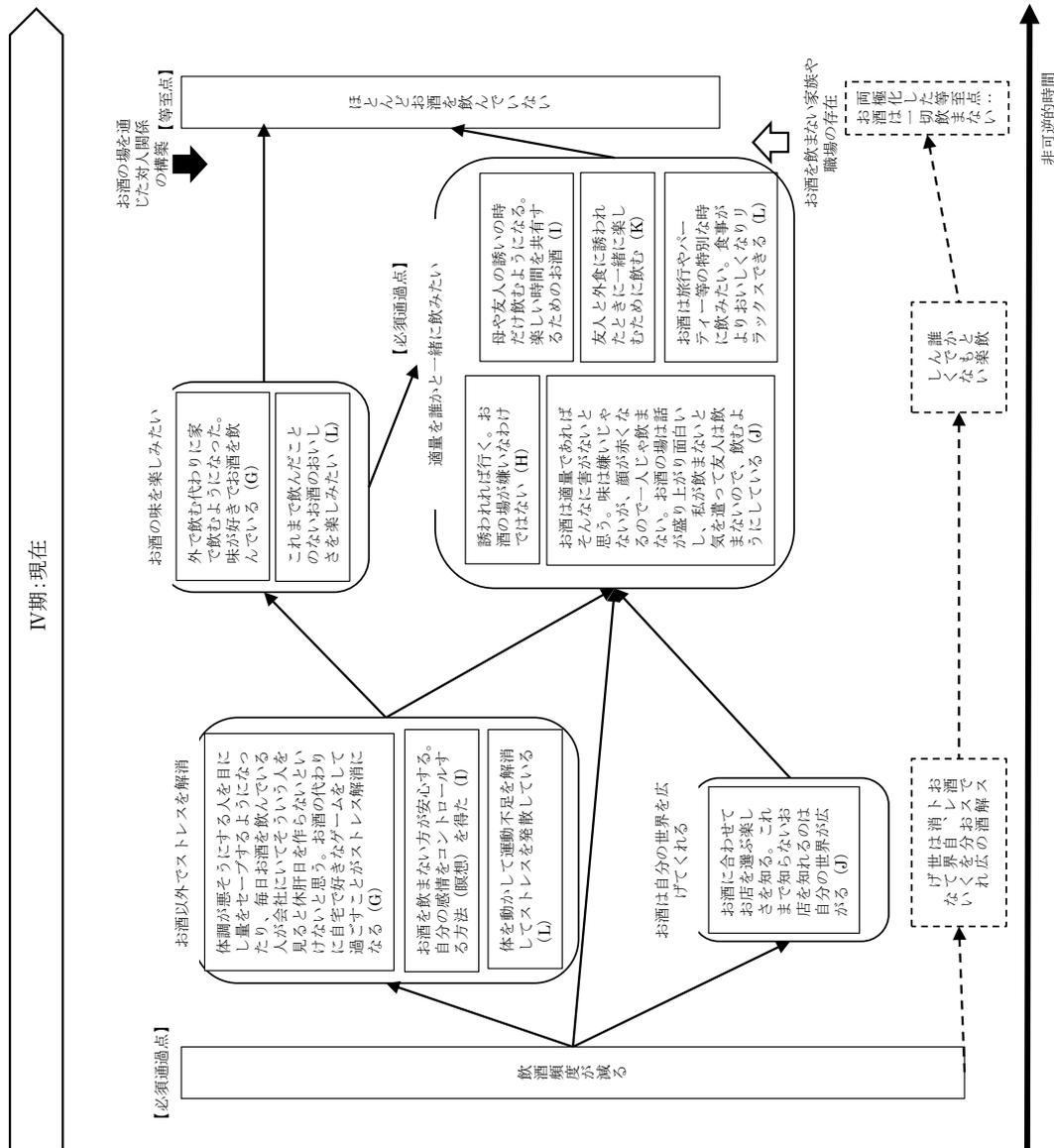


図 10. 中止者の第IV期：現在に至るまでの過程（T E M図（詳細））

資料：インタビュー調査をふまえ筆者作成。

1)図 1 に同じ。

と変わる人も確認されたが、そうした場合でも、その後の新たな対人関係を築く場での飲酒機会を受け入れ飲酒している。加えて、中止者であっても職場の飲み会が定期的で開催されることで、飲酒習慣が身に付き自宅においてひとりで飲酒するケースも見受けられた。このことから、特に社会人（Ⅲ期）以降における生活状況の変化が飲酒行動の定着に影響を与えることが指摘できる。

社会人以降の飲酒経験に注目すると、継続者においては、経済的な余裕や自宅においてひとりで飲酒することへの許容、そして、自宅で過ごす時間の増加により、飲酒頻度が増える。それに対し中止者では、家族構成や友人関係の変化により非飲酒者と時間をともに過ごすようになることや、転職等により職場や部署が変わることで仕事終わりに飲みに行かなくなることを経験し、飲酒頻度が減る。職場の飲み会を勉強の場

であり必要なものと意味づけた人であっても、職場が変わればその意味は消失し、新たな（飲み会のない）職場文化を身に着けていく。

本調査で対象とした20～30代は、転職により職場が変わることや、結婚等による家族構成の変化が往々にしてあることが考えられる。また、就職後の職場や仕事に慣れることで、収入やプライベートの時間が増えるなどの変化が感じられる時期でもある。つまり、こうした変化が生じやすいからこそ、その後の飲酒経験にも影響を及ぼし、様々な飲酒状況となっている現状が推察される。

そして、飲酒に対する意味づけは、継続者および中止者共に、飲酒頻度が変化した後（Ⅳ期）に創造されるのも特徴的である。継続者では“誰かと出合いわいわい飲む”ことや“ひとりの時間は癒しやご褒美”、“味を楽しむ”といった印象が飲酒に対して抱かれる。特に、職場の飲み会を否定的に捉えるほど、友人や自分だけの空間における飲酒の良さに気づき、職場以外の場で飲酒するようになる。一方、中止者では飲酒頻度が減った後に、“お酒の味を楽しみたい”や“お酒は自分の世界を広げてくれるもの”と捉え、“適量を誰かと一緒に飲みたい”という経験に至る。両者いずれも初めて飲酒した際は味を美味しくないと捉えていたものの、継続することで“味を楽しむ”といった変化が生じる。

なお、継続者と比較した際に明らかとなった中止者の特徴としては次の3つである。1つは、初めて飲酒をする際に、「断ることができない」という経験をした点である。両親が飲酒しない被験者が該当し、飲酒に興味がない場合である。2つ目は、実際に飲酒した後の印象として「体調に変化」が生じたことである。飲酒をすると顔が赤くなる、頭痛がする、といった症状が感じられるケースである。そして3つ目は、お酒は「ひとりでは飲まない」と捉える意識である。幼少期のCMから“お酒を太るもの”という印象を抱いていたことや、そもそも大量のお酒が飲めないこと、そして、社会人となり会社に遅刻するわけにはいかないといった強い意思が存在しており、職場以外の場での飲酒が行われなかったケースである。なお、こうした両親の飲酒状況や本人の体質を変えることは不可能である。しかし、2つ目のひとりで飲酒することへの否定的な印象を改善することは、飲酒機会の定着において重要となる可能性が考えられる。

5. 結論

本研究では、若者の飲酒経験について時間経過をふまえて明らかにした。

習慣的に飲酒している人とほとんど飲酒をしていない人との飲酒経験を比較した結果、次の2点が明らかになった。

1つは、社会人以降における飲酒経験が現在の飲酒状況に影響を及ぼすということである。幼少期や大学生の飲酒経験に大きな違いはみられなかった。むしろ、社会人以降において、経済的な余裕や、ひとりでの飲酒を許容すること、そして、自宅で過ごす

時間が増える等の要因によって飲酒頻度が増える。一方、家族構成や友人関係の変化により非飲酒者と共に過ごすようになることや、職場や部署が変わることで仕事終わりに飲酒することがなくなること等の要因により飲酒頻度が減る。2つ目は、飲酒に対する印象や評価はその時々によって変化していくということである。飲酒を続けることで、初めて飲酒した際には評価されなかった味を“楽しむ”ものとして捉える。そして、誰とどこで飲酒するのかにより、各人の飲酒への印象や評価が創造されていく。

本研究では、飲酒動機や飲酒行動の背景にある人々の生活変化の理解に迫ることで、飲酒に関わる社会的な要因の存在を明らかにした。現代の日本の若者においては、職場だけが優先されるコミュニティではなく、友人や家族、自分だけといったプライベートも同様に重要と捉えながら、自分にあった生活環境を構築している。こうした特徴を有する若者の飲酒頻度が増える過程においては、ひとりで飲酒することを受け入れるほか、時間や経済的な余裕も重要な要因となっている。加えて、飲酒頻度が減る過程においては、非飲酒者との生活が変化として見受けられ、相手の存在を意識することが要因となっている。これまで飲酒という食文化で相手とコミュニケーションをとってきた我々にとって、相手に合わせて飲酒しないという選択がなされている実態が明らかになった。

なお、若者のなかでも大卒の飲酒経験者のみを分析している点は本研究の限界である。今後は、様々な学歴や就労状況にある若者にも目を向けることで、広く若者一般を対象とした実態把握が求められる。

6. 引用文献

- 1) 国税庁、『酒のしおり(令和 3 年 3 月)』、<https://www.nta.go.jp/taxes/sake/shiori-gaikyo/shiori/2021/index.htm>(2023 年 4 月 4 日参照)
- 2) 厚生労働省、『令和元年国民健康・栄養調査報告』、<https://www.mhlw.go.jp/content/000711008.pdf>(2023 年 4 月 4 日参照)
- 3) 上村義季・小嶋雅代・永谷照男・今枝奈保美・鈴木貞夫、「女子大学生の飲酒行動と意識に関する調査」、『日本公衆衛生雑誌』、2012、 59 (1)、31-38。
- 4) 北浦綾乃・桑原教彰、「若者に請求する日本酒ラベルの印象評価」、『人間工学』、2021、 57、 2F3-1-2F3-1。
- 5) 笠巻純一、「大学生の飲酒行動に影響をあたえる要因の検討：大学生 1,211 人に対する質問紙調査の結果から」、『学校保健研究』、2012、 54 (4)、330-339。
- 6) 早狩瑤子・小川真理子・三崎直子、「妊婦の飲酒実態と飲酒行動要因の分析」、『母性衛生』、2015、 55 (4)、813-821。
- 7) 山川正信、「女性の飲酒に関する疫学的研究(その 3)量頻度指標とライフイベントとの関係からみた女性飲酒の促進要因について」、『アルコール研究と薬物依存』、1991、

26 (1)、60-69。

- 8) 岡田ゆみ、「わが国の飲酒効果・動機とその関連要因についての文献レビュー」、『日本看護医療学会雑誌』、2018、20 (2)、45-54。
- 9) 安田裕子・サトウタツヤ編著、『TEM でひろがる社会実装—ライフの充実を支援する—』、誠信書房、2017。
- 10) 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ、『ワードマップ TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ』、新曜社、2015。

7. 英文アブストラクト

Research on the Young People's Experiences with Alcohol Consumption
: Qualitative Study of Focusing on the Steps and Motivations of Each Life Stage
Sayaka TAKIGUCHI (Miyagi University)

This study investigated young people's experiences with alcohol consumption, considering the passage of time. Ninety-minute personal interviews were conducted online. Data collected through the interviews were analyzed using Trajectory Equifinality Modeling.

A comparison between individuals who habitually consumed alcohol and those who only drank occasionally elucidated the following two points.

First, the current state of alcohol consumption is influenced by drinking experiences after becoming a working member of society. No significant differences were found in alcohol consumption experiences during childhood or during years of university study. Rather, the frequency of alcohol consumption increased because of various factors such as financial freedom, tolerance developed for solitary drinking, and spending more time at home alone as a working adult. Additionally, factors such as spending time with non-drinkers because of changes in family structure or changing relationships with friends and diminished opportunities to drink alcohol after work caused by a change of workplace or department can lead to lower frequency of alcohol consumption.

Second, people's impressions and evaluations of alcohol consumption change from moment to moment. By continuing to drink alcohol, young people perceive the taste which they did not appreciate before as something to "enjoy." Additionally, individuals' impressions and evaluations are created depending on where and with whom they drink alcohol.